

「神を求め、神を見いだす」(使徒一七章二一〜三四節)

1 アテネの町で

毎週の礼拝を、私どもは教会の暦に従って守っています。今日は復活後第三主日です。よろこべと題された日曜日です。イエスの甦りによって世界が一新された、新しい命に私どももあずかることが許される、それを喜ぶ。よろこべ！それが今日の主の日です(詩編六六・一)。

この日与えられている聖書箇所は、アテネの皆さんと呼びかけているところから明らかのように、使徒パウロが、ギリシャのアテネでおこなった説教がその中心になっています。

この地で伝道をはじめた事情はすぐ前の段落に(今日は読みませんが)明らかにされています。それによるとパウロは、じつはアテネに伝道のために行ったのではなくったようです。

パウロはアテネで二人を待っている間に、この町の至るところに偶像があるのを見て憤慨した。それで・・・(一六節以下)

パウロは使徒として生涯三回の大きな伝道旅行をしています。それがこの使徒言行録に描かれています。

アテネにも立ち寄ることになったのは第二回目のそれです。紀元五〇〜五一年ごろ、第二回目の伝道旅行でパウロはアジア州からマケドニア州に渡り福音を伝えていきます。マケドニアはヨーロッパで、そこに渡って行ったことは、今日から見れば非常に重要ことでした。聖書によれば、フィリピからテサロニケ、さらにベレアという町に行きます。ただ伝道がいつも順調にいったというわけではありません。ベレアからアテネに来たのも、パウロに反対するユダヤ人たちを逃れてでありました。いまお読みした一六節にあるように、パウロは、二人の協力者シラスとテモテが、後から来るのをアテネで待っていたのです。

そうした中で、伝道者としての彼の心を刺激したのが、町が偶像であふれているということでした。憤りのようなものを感じ、それが彼の宣教活動となって吹き出たのです。まことの神を伝える、まことの神とは、イエス・キリストの神、イエスを死人の中から甦えらせた神、この神を伝えずんばやまず、それがアテネの使徒パウロであったように思います。

それに関連して、今日の箇所のパウロの説教の最初のところだけ、はじめに取り上げておきたいと思えます。

アテネの皆さん、あらゆる点においてあなたがたが信仰のあつい方であることをわたしは認めます(二二節)

はじめに申し上げたように町に偶像があふれていてパウロは心に憤りすら感じたのですけれども、この説教のはじめを見ると、アテネの人を前にじっさい語り出したとき、アテネの人との向き合い方が少し違ったようです。少しどころか、真反対になっています。多くの偶像のゆえに憤りすら感じたといわれていたのに、ここでは「信仰のあつい方」といつているのです。「信仰のあつい」は口語訳聖書では「すこぶる宗教心に富んでおられる」と訳されていました。アテネの人に何としても伝道しようとしてなのでしようか、語調を変えているのです（ガラテヤ四・二〇参照）。

「信仰のあつい」と訳されたもの言葉は、神々への恐れとか、もろもろの悪霊への恐れです。つまり、あなた方は、神々への恐れを持ち合わせている、といって評価しているのです。

人がそうした恐れをもつ背後には、自分がまことに寄る辺ないものであるという自覚があるように思います。私どもの人生は私どもの想定通り、希望通りになるものではない。人の力を超えたもの、人の力の及ばないもの、ときには悪しき霊のようなものに翻弄されているように感じられるときもあります。アテネの人々は、それが何であれ、名前は知られなくても、人間を超えたものの存在に気づいている、予感している、それを恐れたり、依り頼んだりしているということです。

2 知られざる神と「まこと」の神

こういったらよいでしょうか。パウロは、アテネの人を、まずはそのまま全部受けとめ、理解し、その生活に即し、その考え方に即して、まことの神を証しし、福音を宣べ伝えようとしていると（第一コリ九・一九以下参照）。

アテネの皆さん、あらゆる点においてあなたがたが信仰のあつい方であることをわたしは認めます。道を歩きながら、あなたがたが拝むいろいろなものを見てみると、「知られざる神に」と刻まれている祭壇さえ見つけたからです。それで、あなたがたが知らずに拝んでいるもの、それをわたしはお知らせしましょう（二二〜二三節）

おびただしい偶像に囲まれて生活しているアテネの人を「信仰のあつい方」とパウロが評価したのは、「知られざる神に」と刻まれた祭壇のあることに気がついたからだといっています。

祭壇というか、そこに祭られている神の名は「知られざる神」。どうしてそういう祭壇ができたのか、いろいろの説明があるようですが、それはともかく、パウロがそれを評価しているのは、こういう理由だと思えます。

つまりアテネの人たちは、神について、神は人とまったく異なっており、人間の能力ではそれを知ることができない。しかし、知らない、知られない存在であったとしてもそれをあがめている、そこに宗教心があり、信心がある、そのことを、「知られざる神に」と刻まれた祭壇の存在は示している。たんなる偶像ではない。しかしまこ

との神を知っているともいえない。それなら、その知らずに拝んでいるもの、それを私が知らせてあげようというのです。

神は私どもに知られないのか、知られるのか、それがパウロによってここで問題にされていることです。パウロは神を私どもは知りうるかと考えています。どうして知られる、知りうるのでしょうか。パウロは、従って聖書はこう考えています。

世界とその中の万物とを造られた神が、その方です。この神は天地の主ですから、手で造った神殿などにはお住みになりません。また、何か足りないことでもあるかのように、人の手によって仕えてもらう必要もありません。すべての人に命と息と、その他すべてのものを与えてくださるのは、この神だからです（二四～二五節）。

まことの神とは、人間がつくった神ではない。神こそが万物をつくり、人間をつくり、すべてを与えてくださる神です。世界の創造者にして、摂理をもって治めておられる方です。とすれば私どもがこうして生きている、息をしているというそのことがまことの神を証している。神は知られないのではなく、知られている。神はご自分を知らしめているのです。

これがパウロのいう、神は知られる、知りうる、ということの第一の意味です。「手で造った神殿など」という言葉は、アテネの丘にそびえ立つ、当時はまだ廢墟ではなかったと思いますが、いまや世界の観光地でもある、私は見たことがあります。パルテノン神殿などのことです。どんなに壮麗であったとしても、まことの神を入れるには小さすぎるのです。

3 近くの神

神は知られる、ご自身を知らせておられる、このことで、パウロはもう一つのことを述べています。

神は、一人の人からすべての民族を造り出して、地上の至るところに住ませ、季節を決め、彼らの居住地の境界をお決めになりました。これは、人に神を求めさせるためであり、また、彼らが探し求めさえすれば、神を見いだすことができますようにということなのです。実際、神はわたしたち一人一人から遠く離れてはおられません（二六～二七節）。

神は万物をつくった、また人間をつくった。それだけではない。人間が一定の秩序のもとに生活することが出来るようにしてくださったというのです。その定めが時代とともに変わるといふことは当然だとしても、私どもの生活は、私どもが単独ではなく、共に生きるといふことで、安全と恩恵を与えられています。その点をたぐっていても、神は知られるのです。ですから「神はわたしたち一人一人から遠く離れては

おられません」。これがパウロのメッセージです。

この聖句を読んで私はどういう訳か、ノアが洪水の後、水か引いたかどうか知るために、箱船から鳩を放つたことを思い出しました。ノアにとって救いはまだ遠くにあった。だから鳩を放つた。二度目に鳩が放たれたとき、鳩はオリーブの葉を加えて戻ってきた。三度目に放たれ時戻ってこなかった。土地は乾き、救いは箱船の周りにまで及んでいたのです。遠くに求めなくていい。神は近くにおられる。「われらは神の中に生き、動き、存在する」。これがパウロの思いでもありました（創世記八章を見よ）。

しかしそれなら、この知りうる神、知られるべき神は、私どもによって本当に知られてきたのでしょうか。知られているのでしょうか。知られてこなかった。それゆえ人々は偶像をつくり、みずからご自分を示しておられる、知らしめておられるまことの神を見失ったのです。

わたしたちは神の子孫なので、神である方を、人間の技や考えで造った金、銀、石などの像と同じものと考えてはなりません。神はこのような無知の時代を、大目に見てくださいましたが、今はどこにいる人でも皆悔い改めるようにと、命じておられます（二九〜三〇節）。

パウロによれば、無知の時代は去った、「知られざる神に」でよかった時代は終わったというのです。それが「今」という時代です。神ご自身が、神についての無知の時代に終止符を打った。まことの神について知らないというのは不信仰になる時代、不従順になる時代だということです。

まことの神はイエス・キリストによってご自身を知らしめたのです。イエスを死人の中から甦らせることによって罪の贖いがなしとげられたことを、この贖いに信仰によって私どもだれもが気づくことができることを明らかにされたのです。神は世界をつくり、恵みによって治めているだけではない。私どもを救う神です。私どもを新しく生まれ変わらせてくださる神です。

さてパウロのアテネ伝道は、いろいろの事情があったとはいえ、最後のところを見ると決してはなばなしの成果をあげて終わったということとはできません（三二節以下）。復活のことを語り始めると、ある人はあざ笑い、ある人は、いずれまたの機会に聞かせてもらおうと行って立ち去ったとあります。パウロはアテネで何人かの人を得ようとつとめました。そのため彼らの偶像礼拝を、神を恐れる所作として積極的な面から評価して福音を語ろうとした。いずれにしても福音を彼は語ったのです。

むろん全然成果がなかったわけではありませんでした。記録に残るかぎりキリスト者となった最初の裁判官ディオニシオ、そしてダマリスという婦人がこの時に入信しています（三四節）。時が良くても悪くても、人を神のために獲得するために、み言葉をしっかりと語り聞いていきたいと思えます。